

小山 渉 個展 「心臓が動いている The Heart is Beating」

4/30 - 5/26 @ デカメロン

Statement

今回の展示タイトルである“ The Heart is Beating” は、ある統合失調症の方が死の直前に語った言葉から引用している。「心臓が動いている」という事に違和感を覚える瞬間とはどういうことなのか。

精神科医の木村敏（1931 - ）は、自己の存在を根底から揺るがすシチュエーションとして、「愛の恍惚、死との直面、自然との一体感、宗教や芸術の世界における超越性の体験、災害や旅における日常的秩序からの離脱、呪術的な感応、分裂病（統合失調症）や鬱病の発症」を挙げている。

統合失調症の症例において、その死は不可解であることも多く、本当の意味で他者から理解されることはないのかもしれない。ただ、多くの場合に人々は出来事に意味を見出し、その出来事を自身の中で理解できる範囲で整理されたものとして片づけてしまう。

また木村敏は、常識的日常性の世界公式として $1=1$ を挙げている。一方で、統合失調症が持つ世界観は $1=0$ であり、 $1=2$ 、あるいは $1=1$ という流動的な世界観だとして語っている。

分からないものを単純な理解や単純な悲しみなどの情動に身を任せて要因と結果で片づけてしまわず、安易な答えを出さず留保する。分からないものに対して分からないなりに想像を思い巡らしてみることが、現代の壊れかけた世界において私は重要だと思う。

そうした想像力が目に映る世界だけでも何かが変わるかもしれない。

小山 渉 | Wataru Koyama

1992 年生まれ、2016 年東京造形大学卒業。

人間の精神や想像力への関心をベースに、映像や写真、インスタレーションなどの発表を行う。

近年は精神福祉施設で働いたことをきっかけに精神疾患にまつわる作品を展開している。

主な活動は、個展 “Untouchable”（2019, 北千住 BUoY, 東京）、

グループ展 “1GB”（2020, スパイラル, 東京）、“Escape”（2018, Art Center Ongoing, 東京）、

パフォーマンス “Phantasma”（2019, blan Class, 神奈川）等。

1 “Cloudy Heart”

Sound Installation, 2021

アクリルボックスの中には密閉された煙が漂い、

心臓の鼓動の音圧によって曇りの中で見えない心臓が動いている。

精神科医達のあいだで、患者に対して“曇らせる”という表現を使うことがあるらしい。

“曇らせる”とは、いわゆるこの合理的社会に順応する状態を指すのだと解釈している。

一方で、“晴れている”状態とはどういうことなのだろうか。

2 “火の会話 | Fire Dialogue” (#1 ~ #8)

Photograph, 203×254mm, 2021

火が付いた煙草からもう一本の煙草に火を分け与えてもらう。煙草自体は息を吸いこむ時だけ火がつく為、お互いが息を吸う動作が合わないとなかなか火がつきづらい。呼吸は日常生活で無意識に行う動作と、スポーツなどの場面で意識的に呼吸をコントロールして行う二つの動作がある。

このタバコから火をつける動作は、自分の呼吸と相手の呼吸を意識することになる。

火がついたその瞬間、生を確かめる。

3 “心臓が動いている | The Heart is Beating”

Video Installation, 2021

精神科医の川上さんから最近自身の身の回りで起きた統合失調症の方の死についての話を聞いた。

話を掘り下げていくと自身の統合失調症の姉も数年前に隅田川に飛び込んで亡くなっていたという話が出た。

川上さんは姉に対して、医者として統合失調症を考えること、家族として想うこと、

そうした二つの顔が交互に垣間見えていた。

私は川上さんにお姉さんについての手紙とカルテを書いてもらうことにした。

4 “Mehr Licht? | More Light?”

Sound Installation, 2021

ある統合失調症の方の「日常」について話を聞く。

5 “最期の1分 | Last minute”

Single channel Video, 2020 -

友人が亡くなった私の個人的な経験、手塚治虫の最期の1コマのエピソード、パンデミックの状況下、これら3つの要素からこの作品は着想された。この作品は、撮影時間1分の制限の中で最後の言葉(遺言)を残すビデオで、私のライフワークとして2020年から始めて、不定期で撮影していく。

内容については、私が現時点で最後に残したい言葉を1分間で撮影していく。

人間の終わりは全てを残すことは出来ない。何か1つ重要な事が残せたとしても、他の重要な何かは抜け落ちてしまう、そうした最期の言葉というジレンマに対して、私は少しでも抗ってみたい。

私にとってこの実践は、本当の死が訪れた時に後悔しないように練習するためのもので、

私はこれからもインチキな「最期の言葉」の練習を続けていく。

(作品では意図的に音声は極端に小さい映像も含まれます)